

苦先 *K'u-hsien* 等の字面で記されてある地に當てるべきであると思ふ。なほ且つ回鶻で古の龜茲、今の庫車を *Kūsān* と呼んでゐたことは、別に回鶻文の佛典の斷簡によつて明らかに證據だてられる。即ち自分の有するツルフアン出土の佛典斷片に、「*kūsān* の國に於て *suvarnapuṣ*…と名づけた王の時」云々と見えるが、唐書西域傳によると、龜茲國に於て、唐の太宗と同時代の王の父に蘇伐勃駛（玄奘の西域記に金花王と譯してある）即ち *Suvarṇa-puṣpa* といふ王があつたことが明らかで、この斷簡文書の王名はこれに當る。従つて龜茲は古きトルコ語である回鶻語では *kūsān* と稱せられたことは疑ない。それでかかる知識を以て前記のミュラー氏の解説した回鶻文佛典の奥書に對すると、その第一の「*Kūsān* の語から *Barčuq* 即ちトルコの語に譯し」は、「龜茲の語からトルコの語に譯し」たこと、第三の「*kūsān* の語から *Toxri* の語に譯し」、*Toxri* の語から *Türk* の語に譯した」は、「龜茲の語からトカラの語に譯し、トカラの語からトルコの語に譯した」といふことになり、従つて従來トカラ語の *B* 種、即ちトカラ語の一方言で、古の龜茲焉耆高昌等一帶の地方に實用語として行はれたものを、何と名づけてよいか不明であるとせられたものは、明らかに *Kūsān* 語即ち龜茲語と名づけて然るべきであるといふのが自分のこれら兩種の論文に於て述べた要旨であります。

私はかかる考を公けにした時に、この説は「歐洲の東洋學者の間に勢力ある説とは異つた見解を施したものである。……更に詳密な論證を加へてこの考を一層確實になし得るか、もしくは翻然歐洲學者の説に追隨するか、それとも尙ほ別の見解を加ふべきか、すべてこれを他日に期せねばならぬ」と述べ、また「余の解釋の當否は、固より嚴正なる學界の批評に待たなければならぬ」とも述べて置きました。然るにペリオ氏は一九三四年の *Journal Asi-*